私のテーマ

天誅組を語り継ぐ
～終焉の地・奈良県東吉野村から～

奈良県東吉野村
阪本　基義

今や、坂本龍馬が教科書から消える？といわれる時代である。もちろん、天誅組を研究する公的機関はほとんどない。あったとしても小さなゆかりの市町村と天誅組の軍令にある「一心公平無私」に心を寄せるファンが組織する民間団体である。

天忠組シンポジウム

天誅組では土佐脱藩の志士が17人と最も多い。土佐四天王の一人・吉村虎太郎、那須信吾、安岡嘉助、池内蔵太、島村省吾、生き残って明治時代に活躍した石田英吉など多士済々である。

２０１３年11月、天誅組の変から１５０年を契機に「天誅組をマイナーからメジャーへ!!」を合言葉に奈良県内天誅組ゆかりの五條市・安堵町・十津川村・東吉野村の四市町村が連携して「天忠組シンポジウムｉｎ東京」をスタート、東京で５回、奈良市で１回開催した。２０１９年９月28日、「天忠組シンポジウムｉｎ高知」～天忠組を語り継ごう～、今回が第７回目である。天誅組総裁・吉村虎太郎の生誕地・高知県津野町には最大の協力をいただき、高知県内外から３５０人近くの参加を得て盛大に開催された。

幕末の若者たちの「志」を共有しよう。

シンポジウムの冒頭、津野町立葉山中学校の松本陽莉さん（3年）が「天忠組シンポジウムｉｎ高知」の趣旨を力強く朗読してくれた。

『今の世に天忠組の志を知る人はいかほどあろうか。今を去る百五十有余年前、自らの利益を一切かえりみず、幸せな国、明るい家庭、豊かな人々、そして笑い声の絶えぬ故郷を夢見て立ち上がった若者達がいた。それは暴挙かも知れぬ。これを迎え討った諸国の藩士達、国の秩序を守ろうとした人々である。共に未来を見据えて、深山幽谷に命を落とし果ては獄舎に繋がれて斬罪された。こんな人々の血と汗と涙があって、今我々が幸福を享受している。

歴史とは「いきさつ」だ、いきさつを知らずして未来はない。今も奥大和では彼らの功（いさおし）を忘れず、碑（いしぶみ）に香華を手向ける老人らが居る。こんな記憶もいつまで伝えていく事が出来るのであろうか。知ってほしい、聞いて欲しい、そしていつまでも伝えてほしい。自らを犠牲にしても人々を幸せにしたいと無償の愛を捧げ尽くした若者たちの事を……。』（奈良県立大学客員教授・岡本彰夫氏）と、また、同町立東津野中学校３年の馬場 巧君・池 愛奈さんは、東吉野小学校と中央小学校の交流学習での体験発表の中で「大きくなったら吉村虎太郎ら天誅組志士たちの眠る東吉野村を訪ねたい」と話した。会場は三人の中学生の発表に共感の大きな拍手を送った。

平成26年から東吉野村と津野町が小学生の交流を始めた。東吉野村の子どもたちが吉村虎太郎や坂本龍馬の銅像に出会い大きな感動を覚えて帰ってくる。また、天誅組ゆかりの地の盟約を結んでいる愛知県刈谷市へも歴史学習に出かけ、学校の学習発表会で天誅組の研究や劇を発表している。

現地に行って歴史的事象に思いを馳せるということは子どもたちにとって大変意義深いことである。坂本龍馬記念館が取り組んでいる「拝啓 龍馬殿」「夏休みりょうま工作教室」「夏休み子どもフォーラム」「学芸員の出前授業」などは、歴史を楽しく学ぶことができる当を得た活動である。

「百聞は一見に如かず!!」これらさまざまな取り組みは子どもたちに大きな影響を与えることは疑うべくもない。「天誅組を語り継ぐ」とは、次代を担う子どもたちに、将来への肥やしとなる「大いなる志と希望」を語り継いでいくことにほかならない。

津野町で開催された「第７回天忠組シンポジウムin高知」の様子＝2019年９月28日

「瑞西で龍馬さんと共に書に游ぶ」

現代龍馬学会副会長　竹内　土佐郎

スイスからのお招き

それは、二〇一八年の四月頃であった。

在日本大使館・文字アートグループの主催による「―日本からスイスから―書・文字の世界」展に、スイス在住の三木佐和子氏から是非にとお招きの電話をもらった。展示会の開催期間は、二〇一九年六月十三日から八月二十八日迄、場所は、ベルンのスイス日本大使館広報センターである。その企画内容は、それぞれの出品による日本の書と現地スイスの書とのコラボレーション・坂本龍馬についての講演会、そして書のデモンストレーションを行って欲しいということであった。なにさま突然の電話であったので、即答はできず少し時間をもらって考えた末、龍馬さんと一緒に行かせてもらい書の揮毫には、龍馬の匂いのする文句にしようと心に決め「よっしゃ」とスイス行きを承諾した。

スルツベルゲル・三木佐和子氏は、私の教え子である。彼女は、スイスに渡って四〇年余り「外国語としての日本語」教師として大学、高校の他、市民大学講座などで教鞭をとってきた人物である。現在は、日本大使館文化センターで「日本語と書道・文字」文化コースの講師をしている。スイスにおける日本語教育の推進の功績を認められ、平成三十年度に外務大臣表彰を受賞されている。

書・文字の世界

この展覧会の目的は「書・文字の世界」と題し、教師、家族、親日家、日本の文化、スポーツに興味のある方々、教育機関や学校の教育陣など広く公開するものであった。

龍馬の講演は、予め話す原稿を用意しインターナショナルの英語はスイス人も解るらしく、その原稿を三木氏の息子さんに翻訳してもらい、それに基づいて話すことにした。

講話は、坂本龍馬記念館発刊の冊子を参考に「龍馬とは、どんな人」と題して龍馬の生いたち、江戸での剣術の修行、河田小龍との出会い、龍馬の脱藩、開明的な考えの勝海舟を訪ねる、薩摩藩の西郷隆盛と会う、薩長同盟の成立、船中八策を提案、大政奉還なる、坂本龍馬・中岡慎太郎暗殺される等の項目を掲げ、封建的な幕藩体制から幕末維新という新しい国づくりに奔走した龍馬の姿を話す。龍馬をわかっている人、龍馬を初めて聞く人、龍馬をあまり知らない人など五〇人以上の視聴者を対象に、パワーポイント日英語作成、二面スクリーンで重要人物の映像を見せての講話をさせてもらった。これには一度もリハーサルをしなかったにもかかわらず、翻訳者の三木さんとは呼吸もピッタリと合い、スムースに終れたのはお陰様で良かったと思った。坂本龍馬記念館には、写真、資料の提供、アドバイスなど頂き深く感謝をしている。

書の方では、スイスは文字を書くのに硬筆のペンを用いて言語を花文字の書にする。日本では、スイスの硬筆と違って柔剛の弾力のある性質の毛筆を活かして緩急と抑揚を駆使し、温もりと優しさのある柔かい線、力強く剛胆な線など様々な線の文字を情感に任せて表現することができる。書は、その人の意志を伝達する大切な魂なのである。

龍馬の魂を書に

このコラボ展には、全紙、半切、半切の二分の一、色紙など含め数十点の作品を出品させていただいている。時に龍馬の魂を私なりに感じながら書にさせてもらった作品として「心如鐵石」（こうだと思ったら心は、石のように固く実行する龍馬）、「霊峰富士

山」（心は大きく、日本は勿論のこと世界を見渡す龍馬）、大勢の皆さんが見守ってくださる中で、デモンストレーションとして畳四枚位の画仙紙に「維新回天龍馬」（新しい時代に変える龍馬）は、力強く胆力を込めて揮毫させてもらった。その後もこの書展は、入観者も多くあり期日を延期して開催されたと言う。

慶応三年十一月十五日悔しくもその命日がなければ、その後亀山社中を変名し商船をして、世界の海を巡ってこのスイスの国へも来ていたかもしれない。

写真：在スイス日本国大使館提供

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十）―

ロマンティックな史跡

宮川　禎一

史跡とはかつて起きた重要な歴史事象を偲ぶ場所だ。関ケ原の古戦場跡や池田屋騒動跡など、各地に史跡がたくさんあるのが日本のよいところだ。なかに恋愛に関する史跡もある。龍馬とおりょうが新婚旅行で登った霧島山などは龍馬ファンが二人の足跡を追体験するのに格好の場所だ。

最近、京都市西京区大原野小塩町にある十輪寺という在原業平ゆかりのお寺に参拝したが、本堂の裏山の尾根上にある「塩竈」の遺構を見て、深く思う事があったのだ。

この寺に関わる在原業平の和歌は

大原や　小塩の山も　けふこそは　神代のことも　思ひ出づらめ

いつもの「心あまりて言葉たらず」な業平様の歌だが、大意は「京都西郊の大原野、小塩の山にいる私は、今日こそは神代のことも思い出すのですが・・」。なんのこっちゃ？・である。意味不明だ。しかし何かが仄めかされている。この歌にまつわる後世の物語がある。

華麗な女性遍歴のすえに在原業平が晩年隠棲したとされるのが十輪寺だ。その北数キロのところに藤原氏の氏神を祀る大原野神社がある。そこには藤原氏の高貴な女性が祭祀のために定期的に参拝に訪れる。時の二条帝の后である藤原高子は実は業平の元恋人であった。十輪寺の業平は高子が大原野神社にお参りする日に限って塩竈を焚くのだという。南の山に紫の煙がたち昇るのを彼女が神社から見つけて「まあ！」と何かを感じるのだと。「神代のこと」とは遠い昔の恋の想い出のことであろう。そんな王朝貴族の恋愛譚をもとに近代になってから塩竈が復元されたのだ。いやはや、こんなロマンティックな史跡があったとは・・。

考古学的にはこの付近から九世紀頃（業平の時代）に緑釉陶器を焼いていた窯跡がいくつも発見されている。平安京に住んでいた人たちにも西南の方角にたちのぼる煙が見えたはずだ。「あれは業平様が元カノに想いを伝えるために焚いている塩竈の煙だよ」などと噂をしたかも知れない。

かくも日本は「史跡と物語の国」なのである。

京都西山の十輪寺にある「塩竈」
（汐水を煮つめて塩をつくるかまど）

第3回　龍馬のひろば

「龍馬のひろば」へ　ようこそ！

今回は「竜馬がゆく」の大好きな場面をあげてみましょう・・・・・という標題でした。「竜馬がゆく」なら、会員さんからの原稿が殺到するだろうと予測していました。ところが、名作には感想も出しづらかったということなのでしょうか。原稿の集まりが悪いということで、急ぎ私の感想もまとめてみました。次号以降へのコラム欄へも掲載したいと思いますので、まだお手元に原稿のある方々はぜひとも事務局あてにお寄せくださるようお願いいたします。（締切り２月 14 日）

現代龍馬学会 会長　宮　英司

北海道滝川市　堀　美幸

もし龍馬さんが
近江屋で暗殺されず人生をまっとうしていたら
歴史は変わっていたでしょうね
北海道の開拓に乗り出していたら
北海道は変わっていたと思います
函館戦争は
なかったとしたら
どんな北海道になっていたでしょうね
大政奉還を終え
徳川に使えていた
武士達はあなたを
憎くて仕方がなかったでしょう
その武士の行き場を
あなたは考えていたし龍馬さんが
居なくなった事に
あなたが予想していたとおり
京都は焼け東北全般に
明治維新の官軍が
征伐に行く事もなく大勢の人が亡
くなる事はなかった
と私は勝手に思っています
もう少しで歴史が変わった
11月15日がきますね残念で残念で
仕方がありません
龍馬さんがあの日を迎えなければ
日本北海道の歴史ももっともっと
良い方向に変わっていたと思って
います
龍馬さんに会いたかったです
くよくよしちゃいかんぜよ
と笑う龍馬さんが目に浮かびます

「竜馬がゆく」の思い出

高知市　宮　英司

それが、竜馬の最後のことばになった。言いおわると最後の息をつき、倒れ、なんの未練もなげに、その霊は天にむかって駈けのぼった。
天に意思がある。
としか、この若者の場合、おもえない。
天が、この国の歴史の混乱を収拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。
この夜、京の天は雨気が満ち、星がない。
しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあけた。

「竜馬がゆく」を読んだ仲間うちでは、よくこのラストシーンが話題にのぼる。特に、「天が、この国の歴史の混乱を収拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。」の部分と「しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあけた。」は、何度読み返してもグッとくる。坂本龍馬が、稀代の歴史家・司馬遼太郎さんによって幕末の英雄に祭りあげられた名文だと思う。

実は、自分が仕事を始めた頃だから、まだ坂本龍馬記念館の建設構想が持ちあがるよりも前の段階。桂浜の龍馬像を一心に見あげる東北の青年と出会った。聞けば、「竜馬がゆく」を読んで感激して、そのまま夜行列車に飛び乗って龍馬像を拝みに来たという。龍馬ファンの集いなどでも時々似たような話を聴く。他に何もなかったので、当時の龍馬像は、それくらい大きな役割を果たしていた。

教え子のO君。高知の会社に勤めている。中学3年生の時には進路が決まらず、お家の方はもちろん、本人もかなり焦っていた。休み時間に龍馬の話になった。彼には教科書程度の知識しかなかったが、図書館で借りた1冊の本のおかげで龍馬に目覚め、「龍馬がゆく」を手にするほどになっていった。受験勉強にも力が入り始め、希望の進路を勝ち取ることができた。数年後、社会人になった彼と同窓会で会った。すっかり龍馬通になっていた彼と「竜馬がゆく」について話し込んだのが懐かしく思い出される。彼の口から「『竜馬がゆく』のラストシーンに痺れています。」という言葉が飛び出して、大いに話が弾んだことだった。

そういえば、長男が在籍していた小学校の「一日先生」の授業をしたこともあった。迷わず“龍馬”を取りあげた。わずか40分くらいだったが、子どもたちはよくついてきてくれた。1学期の6年生には少し難しかっただろうに…。「竜馬がゆく」の紹介もしたけれど、子どもたちにどれくらい届いただろうか。とまれ、高知で暮らす子どもたちには、あらゆる機会を通じて龍馬の生き方を伝えるべきだと思う。そして、龍馬の基本がマスターできた子どもたちには、ぜひとも「竜馬がゆく」を紹介したいと考えている。そうすることで、一人でも多くの子どもたちが歴史の扉を押しあけるようなパワーを身につけてほしいと願っている。

大きくとらえると、坂本龍馬記念館は「竜馬がゆく」のストーリーを体現した建物ではないか…と思ったりする。龍馬の各種のステージ、大きな業績の紹介、出会いの達人ともいわれるほど多くの人々の写真…。これからも龍馬記念館と“竜馬がゆく”から様々なことを学んでいきたいと思う。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262　高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001
FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp